【地域情報】

おいで…　おいで…

人と狐の出会いの物語

平井亜未*・加藤寛之**

キーワード：狐に化かされる、文化新聞、日高市、飯能市、秩父市、城西大学

加藤寛之

昔話だ、と思うのが普通の人。ある所の話ってどこのことだ、って思うのも普通の人。だが、狐に化かされた事件は古い話ばかりではないし、遠い場所の話でもない。

本誌は地域連携センター紀要なので、飯能地域で発行を続けている「文化新聞」からこの近辺で起こった狐に化かされた事件をいくつか拾ってみたい。多少読みやすくしてあるが、原文にちかい状態で紹介したい。

最初は、狐の美女がタクシーに乗った事件。その場所は田波目。城西大学坂戸キャンパスの南に流れる高麗川を渡るガタガタ橋のちょっと先の県道付近が田波目地区だが、そこで起こったと「文化新聞」昭和35年５月10日号は伝えている。

> 部落外れの県道際にお地蔵様があってやはり30年ぐらい前まではキツネが出没した。ここからある晩、若い美女が自動車に乗った。「坂戸まで」と言うことだったが途中で「おろしてくれ」と運転手に声をかけた。そして「坂戸まで、と言ったのだから料金は坂戸までの分を払います」と銀貨を渡したと同時にゾッとするような笑いを残して消えてしまった。運転手は青くなって帰ったが後でポケットから金を出そうとしたらカシの葉が入っていたので又ゾッとして３日ばかり寝込んでしまった。

この話は「日高地方に残る伝説」と題する記事にあるのだが、妙にリアルだ。30年という数字が入っているので時代は昭和初期くらいだろうし、タクシーに乗るのだから伝説というにしては新しい。ただ、運転手さんが何処の誰かハッキリしないことが残念だ。

このあたりで狐に化かされた事件は、他にもある。それは「文化新聞」昭和33年10月８日号にある滝沢嘉一さんとおっしゃる方の体験談。

> 昔は高麗川駅附近から鹿山原宿、（現日セ）工場附近高萩旭ケ丘開墾地は一帯の雑木山で、駅附近はもとは四本木という地名で、当時富士屋、梅田屋という今でいう料理屋を含めて３、４軒

＊　城西大学広報課事務職員
＊＊　元城西大学広報課長

きりなかった。だから狐や狸がよく出て人を化かしたものであった。自分もある時、四本木のお茶屋でしたたか呑んでの帰り道、今の日セ社宅附近で「いまかい」「いまかい」と妙に腹に沁みこむようなイヤな声で呼ばれたが全然人の気配がない。さては、噂に聞く狐の野郎のからかいかと思った瞬間、ゾーッとしていっぺんに酔もさめたが、急に頭の中が空っぽになり、方向が全然分からなくなり、夜明けまで山の中を歩かせられて、ふらふらになり家にたどりついた事があったが、今の若い者に聞かせたら大笑いされるが、まったくの嘘のような本当の話だ。

日セとは日本セメントの略称で、現在の太平洋セメント埼玉工場のこと。旭ケ丘開墾地は埼玉県立日高高等学校周辺。要するに先に紹介した田波目のすぐ近くの出来事だ。深酒した後ということが気になるが、本人は「いっぺんに酔もさめた」と証言している。

次は少し西へ行った高麗から家へ帰って起こった事件。これは「文化新聞」昭和53年11月19日にある小谷野寛一氏が書いた「キツネに化かされた話」。冒頭に山下清氏記録、末尾に（昭和39年記）とあるから、小谷野寛一氏はそれを収録したのだろう。これは要点で紹介したい。

明治24年ころ、隣の婆さんが狐に騙された話。お婆さんは自分の生家である高麗の家をたずねて、暗くなって平松へ帰途についた。道は大部分が山林地帯だが、ふだんから往来しているので、約４キロの道を迷わず家に帰った。前の家に風呂がたったと呼ばれたので風呂をつかい、よく温まった体で帰ろうとした。道は一直線で500mほど。それを裏のそで垣を出て右に折れ、また左に折れて、反対の方に向かって、道でなく畑を歩き、田に出てもまっ直ぐに進んで、つい小川にはまったのであった。その道行きを兄たちと調べてみたら、下駄の跡と、犬とも猫ともつかぬ獣らしい足跡が乱れていた。お婆さんの話によると、高麗からの帰り道に提灯のようなものが前を行くので、よい道連れと思ったそうだ。父の話では、お婆さんを助けた時に、何か光るものを見たという。

この事件は明治24年ころとあるし、記録時点も書いてある。誰が関わっているのかも分かっている。高麗から約４キロにある平松は、飯能市精明地区にある平松だろうか。この文には小谷野氏の祖父や父が狐について語った内容も書いてある。このころの狐は、人の生活に身近な生き物だったことも分かる。

小谷野氏は狐に化かされた飯能地区での事件を、ほかに２編書き残している。それは「文化新聞」昭和53年11月21日と同22日に連載している。ここでは21日の内容を紹介したい。それは明治28年生まれの飯能の中藤地区に住むＭさんが大正11年秋に体験した事件で、要点で紹介したい。

夜の帰り道、これまでもいろいろな人が狐に化かされたという所にさしかかるとはるか先に提灯が見えた。坂道を急いで登って「お～い、中藤へ行くのかい？一緒に行くべえ」と言うと、その人は立ち止まり振り向いた。若い娘さんだった。しかし、少し行ったときにその人は山路へ入って行く。夜中に人の通る場所ではない。「おうい娘さん、そっちは道が違うぜ…」。娘はすました顔で真白い手でおいでおいでをします。その顔のあやしいような美しさ！

「行くべえ」という表現が嬉しいこの話は、小谷野氏が童心亭散人の名の「文化新聞」執筆者に頼んで入手した話で、童心亭散人本人も「文化新聞」昭和48年11月27日と28日に連載で書いている。内容はほぼ同じだが、山道へ誘った娘さんは「瞳は美しさを通り越し、物すごくあやしい光を放っていた」となっている。

狐に化かされた事件はこのくらいにして、ちょっと考えてみたい。

現代の多くの人は狐に化かされるとは思っていないだろうが、それは自分が体験していないだけかもしれない。化かされたことのある人にとっては、狐は化かす生き物である。その事件が起これば起こるほど、それは事実であり社会で確信になる。そういう社会になる。狐に化かされた話を馬鹿にしてはいけない。今の私たちだって、本当かどうかわからない価値観で生きているじゃないか。

ただ、狐が生活できる環境がなければ化かす事件も起きない。しかも、そこにそれなりの人数が生活していて狐に出会わないと化かし・化かされるチャンスがない。そう考えると、本稿の平井氏の記事は人と狐が同じ生活圏をもっていたときの出会いの記録でもある。そこには、信じる・信じないとは異なる意味があると思う。

本稿執筆にあたり、文化新聞社様には記事活用を快く承諾をいただきました。ありがとうございます。

聞き書き　平井亜未
話　叔母

聞き取り時期　24年12月(頃)
聞き取り場所　叔母宅

ここでは、昭和30年代に秩父山中で起きた不思議な出来事について、筆者の親族から聞き取った記録をもとに考察する。この体験は、筆者の叔母が父方の兄嫁であるミエコから聞いたものであり、ミエコの父である牛山茂樹氏の体験談である。牛山氏は東京大学出身で夏目漱石の門下生でもある知識人でありながら、秩父山中で「狐に化かされた」とされる不思議な体験をした。

昭和30年代、東京都北区十条に住む牛山茂樹氏は、娘ミエコの嫁ぎ先である秩父郡皆野町三沢地区のヤマジュウ（屋号）を訪ねることとなった。牛山氏は東京で購入した上等な肉を持参し、秩父鉄道黒谷駅（現在名　和銅黒谷駅）で下車後、山道を経由して三沢へ向かった。

日没前の到着を目指して山道を急いでいたが、途中で奇妙な体験をすることとなる。牛山氏は同じ場所を何度も通過していることに気づき、道を間違えた可能性を疑ったものの、やがて「狐に化かされたのではないか」と考えた。その後、明け方まで山中を彷徨うこととなり、疲労困憊の末にようやくヤマジュウに到着した。

ヤマジュウに着いた際、牛山氏のコートにはたくさんの芝が付着し、獣のような匂いが染みついていた。また、持参していた肉はどこかへ消えており、手ぶらでの訪問となった。この出来事に落胆した牛山氏であったが、翌日、三沢の牛沢地区の“おくりでえじん”（秩父弁：山奥に住むお金持ちのこと）の隣に住む福島お菊という女性が、山道で拾った肉の包みを持参してヤマジュウを訪れたことで、肉は無事に返還された。

牛山茂樹氏が秩父山中で体験した「狐に化かされた」という出来事は、当時の山村文化と密接に結びついており、現代的な視点からは、心理的・環境的要因も絡んだ複合的な現象として解釈できる。

山中で同じ場所を繰り返し通る感覚は、方向感覚の喪失や疲労、焦燥感が重なった結果として生じた可能性がある。秩父地方の山間部では、霧や薄暗い景観が視覚の手がかりを曖昧にし、時間や空間の感覚を歪めることがある。こうした状況下では、通常の感覚では説明できない「不思議な現象」として体験を捉えやすい。

一方で、「狐に化かされる」という伝承は、日本の山村文化において自然への畏敬や未知への恐怖を象徴するものであり、牛山氏の体験もこうした文化的背景の中で意味づけられたと考えられる。特に、学問的な知識を持つ牛山氏自身が「化かされた」と語ったことで、出来事に説得力が増し、地域社会の中で物語として共有されやすくなった。

この体験が翌日の福島お菊氏による肉の返却という出来事によって完結するのも興味深い。拾った肉を届けるという行動は、当時の農村に根付いた助け合い精神を象徴するとともに、不条理な体験に一種の救済を与える役割を果たしている。こうして、自然の脅威や異常な体験を地域社会の中で和らげ、意味ある出来事として収束させるところに、秩父地方の山間部にあった山村文化の深い特徴が現れている。